

想像していた通りのお人でした」

「光栄に思います」

尚も、次郎は言い話をつづけた。

「ここ八戸市は、毎年8月31日から8月4日まで行われる、八戸三社大祭が名高いと聴いているが、嘸かし賑やかなもんでしょ」

「20を超える山車の饗宴は、そりゃー見事しか言いようがない。藩政時代から続く歴史あるお祭りです。時間が取れば皆さんでおいで下さい」

「ありがとうございます。小生の傍に深大寺なるお寺があり、三月には例大祭が行われます。それに合わせだるま市が開催され、境内には大小様々な、だるまさんが並び、取引されます。縁日も立ち老若男女で賑やかです。その深大寺に我が家はあり、上さんがコーヒーショップを営んでいます、一度遊びに来て下さい」

次郎とみやこさんは誘われ誘っていた。ケンジがコピーが終わり帰って来た。次郎は立ち上がりながら言った。

「みやこさんは、この書類は有効に使わせて頂きます」

と言った。引き上げ際にみやこさんは、次郎達に深々と頭を下げていた。

「さあー、皆が待っている。目指すは漁港の民宿大漁丸だ」

漁港外れだが大漁丸は直ぐに分かった。やや中に入った所に、BMWは停まっている。ケンジもミニをその脇に停めた、次郎達が着いたと、察したんだろ、駐車場側二階の障子が開き、銘々でお帰りと声がかかった。只今と言
い次郎達も二階へ上がる、

「女将さんが、八戸高校の教頭さんから、今風な男女五人が行く、一晚お

願いすると、電話が入ったと言った」

次郎は怪訝顔し言う。

「今風って小生等も入るのか」

「女将さんはそう言ったんだ、いいじゃん」

と、マキは返し、話は続ける。

「狭いかも知れんが、二階を使って構わんし、冷蔵庫はご自由にと行って下さった。お言葉に甘え、口汚しを始めたところ、次郎美味しいよ」

「ったくもー、呑むことしか頭ん中にはねーのか」

次郎は、ぶつぶつ独り言う。

「もう少しで夕飯出きるから、飲んでてって女将さんが言ってたよ」

次郎は書類の束を広げ皆に言った。

「重要な話がある、酔いが回らん内に話しておく、皆に協力してもらった道中、リスクもあった。そのお陰と言っちゃー遺憾が、内堀も後僅かを埋めるだけとなった。村井瑠璃子の母親のみやこさんは、ひと頃聞いていたみやこさんと大違い、ぐうたら亭主と、家出娘の件で廻りから白い目で見られっぱなし、いつしかみやこさんは人目を、避けるようになり、話もしない様になる。周りの人はみやこさん、元気してるかな等々、声を掛けるも逃げてしまい、口は閉ざすだけ、そんなこんなで何時しか、皆は彼女を避け、彼女も皆を避けるようになったが実際は、いたってみやこさんは、気さくで娘思いの人だ。毎月、きちんと送金はあるし、東都地検秘書課長と自慢していた。そろそろ話しは佳境に入る、昨年同窓会があった。久方振りに同級生と会い、飲み明かしたそうです。今は漁船持ちとなった、釧路でなくなった、土田太郎さ

んとは、親しみを持って接したとか言っていた。それと何故かは言わないし、分かんないが、差出人は記されていたが、名は忘れてしまった。瑠璃子宛にDB2つが届いた、同窓会の翌日、土田太郎さんと一緒に何処かへ、運んで行った。切れ端になったが送り状の一部だと、書類の中から引き出した。辛うじて差出人名が読み取れる。マキ、父さんに送って調べてもらって、先程内堀はあと一息と言ったが、その通りだ。

ここで攻めに行ったんでは二番目三番目・・・と行くに連れ、後出に構えられ、拳句は逃げられるがオチ、ならばどうする」

「次郎、勿体ぶつないで教えてよ」

とマキが言い、グラスを空にした。

「それにも記されているように、厚生労働大臣の北畠善三、東都地検検事正の神谷利一も載っている。不定期ながら二人には、想像出来ん金額の金が動いている。その事実確認をせねばならぬ又薬物、拳銃の東京経由の売買、及び国内での消費と使用の実態、不動産の不正取引等、これ等の裏を取らねばならない。地検秘書室長村井瑠璃子の逸話が記されているが、興味本位で見ない様に」

「お客様、お待ちどうさまです」

と、食品エレベーター脇で女将さんが言った。

「教頭先生のお知り合いと聞きました。父ちゃんと二人腕によりをかけ作りました。いっぱい食べて下さい。飲み物はそこの冷蔵庫からご自由に」「女将さん、中にどの程度入っているかは不明なれど、無くなっても知らんですよ」

「構わんよ、焼酎も入れてあります。ご自由に」

そう言いながら座卓に、コップを置き、大小様々な皿を並べた。

「ご飯が必要になったら声を掛けて、直ぐ運んでくる」と言い階下に降りて行く。

「皆、注いだかな乾杯しよう、ケンジ頼んだよ」

次郎に言われ戸惑いながらも、乾杯の音頭を取った。

「サアー最後の晩だ終わりは、全て良しで行こうぜ」

と次郎は女性陣を見て言った。

「小生等が出て行った後、高校はどうだった、生徒さんは喜んでくれたか」マキとカナは揃えた様に言う。

「そりゃーもー大騒ぎ、教頭先生は怪我があつてはと体育系の先生や、ガタイのいい先生を集め、整理係を命じた。話し上手なヒマちゃんが、パーソナリティを務めた。三人の紹介から始まった。気合と共に朝練風な立ち回りを始める、右に左に走り跳び、転回等々、体育館には、人がなす技とは想えぬ光景が広がり、驚きと歓声が途切れる事はなかった。そこにヒマちゃんの話術が加わり、生徒さん達の目は、奪われっぱなし。ダンスナンバーの時なんか、ヒマちゃんが頭上で、手拍子を誘えば皆ノリノリ、そんな話術の名手は、パルクールを紹介す、片隅に置いてあつた跳び箱と、トランポリンを使い、オリンピック選手顔負けの妙技の数々、生徒さんはただ啞然とするばかり。壁を駆け上り、鉄骨伝いにするすると屋根裏へ、床をを使わずして、体育館の端から端へ移動。くるっと回転しながら、生徒さん達の前に降りた。歓声が上がったのは言うまでもない、ヒマちゃんが生徒さんに言った、まだ時

間があります次は、CD成れど自分達が歌います、聞いて下さい。尚、調子つぱずれも多々ですが、このヒップに免じてご容赦を、と言いつ終わるが早いか又もや大歓声が起こる。代わるがわる歌い、その人以外はサイン会でした。日葵は時計を見、自分達も楽しいひと時を、過ごさせて頂きました、だけど、始まりがある様に終わりもあります。ラストナンバーとなってしまうました、自分達は皆さんの間に入って歌います。ご存じの生徒さんも、おいでになる筈です。一緒に歌って下さいでイントロが流れ始める、そうですこの曲、都はるみさんは好きになった人、三人三様、生徒さんの間に入り熱唱する。裸同然の三人がすぐ傍にいる、生徒さんの手が自然に動く、その都度、先生は右に左に奔走す。よっぽど嬉しかったのか、涙ぐんでる生徒さんがいた。次郎、高校は以上です」

「そうかい、良かったようで」

次郎は丸を作った。

「所で、触って来た生徒さんは、何人位いたんだ」

「次郎、いい加減にしろと」

マキに一括される、次郎は頭を掻き始めた。

「少し永くなるやも知れん、飲みながら食べながら聞いてくれ。日葵からだ、ガキさんから先程E便が入った。そっから釧路に帰れと言っても、帰らんだろうし、俺としてもそんな酷な言い方は出来ない。深大寺まで連れて行ってくれ、後は俺が無理矢理でも釧路に返す、と記されていた。了解と打ち返した。そんな訳で深大寺迄小生等と行動を共にしてくれ、だけど危険が去った訳でない、皆にも言うておく最終レグこそ、注意を怠ってはいけない」

「ヒマちゃん、自分はミニに乗ります。BMWのpassenジャーシートに収まって、開放感があり、風が誘いをかけてきます。サイドカーならではの楽しみもあります又、迷惑ドライバーに遭遇も、そんな時はカナちゃんの指図で動くように」

マキの言を聞いたヒマは、カナと向き合い親指を立てた。ビールから焼酎に変わった、氷の音をガチャガチャさせ始める。さっきの続きから話そう、厚労大臣と地検の検事正が絡んでいた。函館の銃撃事件から、思わぬ方向へ向かいつつある。まだ詰めも必要だし、証拠固めも必要、又さっきも言ったように、一つづつ当たったんでは、トカゲのしっぽ宜しく、大半が逃げられてしまう。様は一遍に踏み込まなければならん」

「では、次郎の策は」

「住吉漁港の、底攫いをお願いしてある。拳銃と健斗さんの携帯電話、手帖が見つければ大きな前進になる。函館南署の片岡警部補から、吉報がある筈だ、それを待っている」

「無かったらどうする」

と珍しくケンジがネガ風に言う。次郎はキツパリ言った。

「それはねー、必ず来る」

やや怒り気味に次郎は言った。

「次郎さん、すまん俺のあさはかさを」

「冷蔵庫にいっぱい入っている、一生懸命に飲まないで飲みきれないよ」
静寂をついてマキが喚いた。

「そうだ呑もうぜ、飲まないで女将さんに失礼だ」

カナが言った。

「勘と永き経験で警察組織の中で、次郎さんは不動のものとなった、誰にも慕われ、真実と市民の安全の為に活動している。そんな次郎さんの足を、誰が引つ張ろうか、俺達はついて行くよ」

と皆が言った。

「ありがたい、自分事で協道に進んでしまった。悪い、つい小生も荒立ってしまった、すまん本題に戻そうこれからを話す。村井瑠璃子のメモは、厚労大臣や地検の検事正への、保険ではなかったかと想う。職務上手伝わされたに過ぎなかった。小生は、そんな風に思っている。村井瑠璃子から指示が出て、実行された。多くはその二人に利益が渡っている。薬物売買、不動産の不正取引、拳銃密売、無論闇献金等等と出したらきりが無い。又、小生等に手を引かせる意味で、嫌がらせが度々、大事にならなかったが幸いと言え、村井瑠璃子は計算に強く、仕事が早いが秘書職以外に、闇献金や薬物売買を始め不正の数々、そんな日々が積もり酒と男に走った。だけど真意は定かでない」

「次郎、いかに対処すかだ、踏み込むにも相手は多いどうする。」

「女性人では大将格のマキが言った。」

「警視庁特殊隊樋沢隊長と、三鷹署一課長の水上警部を予定している。協力要請は、面と向かつては無理が生じる。如何様にするかは思案中、以前高輪署にいた大泉警部補が、今は警視庁捜査一課長に昇進している。一課長にも依頼する予定だ。それと踏み込みには、マトリさんにも声を掛ける。今んとこはそこ迄だ。今迄もそうだったが、踏み込み日が知れては元も子もな

い、事前の連絡もせず、踏み込み日の連絡は当日とする」

「次郎さん、東京へ戻ったら即刻、踏み込みましょう」

「カナ慌てんな、さつきも言ったと思うが証拠が足りない。それと瑠璃子メモによると取引は、厚生労働大臣北畠善三の、河口湖の別荘で一気に行うとあった。全ての取引全部と記されている、一気とはどの程度なのか、全部としたらそりゃー偉き取引だ。失敗は許されん」

カナが聞いた。

「その日はいつか、瑠璃子メモには記載はないか」

「うーむ無いんだ、調べるしかないんだが」

尚もカナが言った。

「調べるたって何処を調べれば」

「今、小生もそれを考えているんだ、大掛かりな取引だとすると、要人警護、二瓶企画が動くんじゃないか、首謀者栗橋健明をマークすれば、ボロが出るんでは」

何故かカナは考え事するが如く、一点を見つめている。

「カナ、何か思い当たるふしでもあるのか」

そんなカナに次郎は言った。

「あっいや別に」

曖昧な返事をした。あのーと、ヒマが言い出した、ヒマなんだと次郎が返す。

「その踏み込み日にちって何時なんですか、私にも連絡くれるでしょうね、釧路に戻ったとしても私は、チームいっぶくのメンバーです」

徐に次郎は言い出す。

「その日は分かっている、さつきも言ったように、自分の狙いは確かなる日を探し、殺人者を捉え、悪を一網打尽が小生の狙いだ。小生に賛同してくれる人は拒まない。一度釧路に戻り、親御さんの許可得て来て下さい。そうすれば皆快く迎えてくれる。日葵分かったね」

「はい、分かりました」

と明朗な返事が返って来た。

女将さんが上がって来て言った。

「あの緑の車でリズムカル音が鳴っています。ひよつとすると電話では」

日葵があっけない、FAXだと言って階下に降りた。バックごとFAXを持ってきた。

「函館を出る時片岡警部補さんに、教えておきました。いつも携行していますと、自分等に画像が直ぐ届く、調べ事や捜査に重要ですと言って、携帯番号を覚えておきました」

「日葵、いい仕事をしたと思う。だけど個人プレーは許さん、今後は慎むようにそれでどつからだ」

「日葵はクスンっとするも、片岡警部補さんからです。今電話かけてみます」

「俺だ、片岡だ」

とギンギンの声が、スピーカーホーンから流れた。

「日葵応答してみてください」

と次郎は言った。

「日葵です、警部補さんそんなに慌てたような」

「おっ、ヒマちゃんかへ、これが慌てられなくて何を慌てよう」

「どうしたーの何があったのー片岡さん」

ヒマの口がややぎこちない、次郎はマイクに向かって言った。

「次郎です、片岡さんすまんです、北海道、青森の反省会をやっている所です」

「多分そうかと想っていたんだが、早い方がいいと思い電話を入れました。

次郎さん出たんだよ」

次郎はあれかなと思いつつ、警部補に返した。

「出たって、生温かい風がヒューつと吹くには、ちよいと早いと想うが」

「次郎さんも、収獲多き北海道に、乾杯し過ぎじゃーないのか」

「あいやゴメン、要件はと」

「これでよーし、本来の次郎さんに戻った話そう、底攫いで出たんだよ、健斗さんのものと思われる携帯と手帖が、もう一つあるよ、驚くなかれ消音器付きの拳銃が、上がったよ、次郎さんの言ったとおり、八戸に向かって敬礼している所だ。手帖には何月何日薬物とかが、記されている、これは取引の日付ではないのか、滲んで読めない所もあるようだ。これから鑑識が調べる、その後警察便を利用して、明日には三鷹署に届くようにするが、それと手帖の気になった所を、FAXしておくがどうだろう」

「待っています、送って下さい」

片岡警部補との電話はそれで終わった。今風なメロディーが流れた。

「あっ来たー」

と日葵が言った。おおざっぱだが五枚送ってきた、不明部分もあるが何時いつ横浜通過とか、羽田に成田、TKに5とかZK、5やNBから5TK等々、暗号めいたアルファベットや数字が並んでいる。瑠璃子メモにも同じように記されていた、双方共通のメモの様だ。次郎はすぐさま片岡警部補に連絡した。

「ありがとう、良く探してくれた、小生等は大助かりだ」

「次郎さんが漁港の底を、探れとか言っておりましたな」

「ムツムツー小生は、そんな事は言っておらんぞ、片岡警部補殿が閃き、実行されたと聞いておるが」

「警部殿は現役時代、そう言っでは部下に手柄を与えている。次郎さんの人は今も残っています」

次郎は頭を掻きながら言う。

「小生、褒められるのが苦手だな、片岡警部補その辺にしといて、小生等は明日東京に戻る、警部補さんからの警察便を待っています」

「早期真実究明を期待しています」

で警部補との電話は終わった。

「次郎、父っ様が良く言ってた。次郎さんわな、時と場合にもよるが、手柄は自分に非ず部下にありと言っていた、今回もその様ですね」
と言ってマキはコップに、焼酎と氷を入れガラガラさせた。

「2時間経つ、小生はゴーベツトだ、ケンジはどうする」

「一人じゃー殺されそうだ、俺も床に就くよ」

「殺されそうって何よ」

ケンジは女性陣にとつちめられる。

「ケンジ、もう少しいてやってくれ、男がいないと淋しいんだ」

と次郎が言うと矛先が次郎に向いた。

「何が淋しいよ私達は、焼酎が飲みたいだけ」

三人はハモった。これは叶わんと次郎は、ケンジに目くばせし床に就く。

翌朝、次郎は散策から戻った。八戸高校の島永教頭が待っていた。

「教頭先生、こんなに早くどうしたんですか」

「届け物をお持ちしました、今日東京に戻ると言っていたので、行かれてしまうといかんと思い早く来ました」

「届け物って何、魚介類」

例に寄ってマキが聞いた。

「いや、そうじゃないの」

マキが言うと教頭さんが、

「魚介類は深大寺の方に送っておきました」

女性陣はそっとVサイン、そしてマキが出て来た。

「じゃー届け物ってなーに」

「はい、生徒達がお礼にと、昨日のスペシャルライブのアルバムを、急ごしらえしました。東京ではコーヒーショップを、営んでると聞きました。そのお店にでも置いて下さい、そうすりゃー生徒達も喜ぶます」

面白可笑しく、生徒さん達の力作が伺える。見るなり女性陣はキヤキヤ、Yだ。

「ありがとう、カウンター席にでも置かして頂く、朝会の時にでも生徒さん

に、お礼を言っというて下さい」

教頭先生は、はいと返事した。

「職員朝会が始りまる時間です、この辺で失礼します。八戸に来た折には、本校にもお立ち寄りください。では、東京までは長丁場ですお気をつけて」

そう言って教頭先生は、自転車を学校方向に走らせた。皆は漁師の食卓を囲んだ。

次郎が今日の予定を喋り出した。

「予定と言ってもひたすら東北道を走るのみ、一般道へ出て深大寺迄は凡そ700k、5時頃迄にはいつぶくに着けると思う、これは机上の時間だ、交通事情でもっと掛かるかも知れん。慌てる事ではない、カナいいか交通ルールは遵守、最高速が120k区間もあるが、敢て出す必要はない又、仙台辺りまでは交通量も少ない、スピードは出傾向だ、速度に要注意。200K毎に休憩を入れる、ガスチャージはその都度満タンにする。100kのスピードは出ている、無謀な車やドライバーには注意し近づかず、相手になつてはならない。以上だ質問は」

と次郎は言った。

皆の顔が次郎に向きキツとし、凛々しさが溢れた。雲一つない青空だ、ワイドイングロードとは言い難いが、高速道は適度に右に左にカーブする、その都度、パッセンジャーシート内で、いつぶく仕様に身を包んだヒマが、右に左に体を移動させている。マキが言った。

「ヒマの奴覚えんのが早い、あの左右への体重移動は既にプロ級だ」

その後、昼食を含め3回の休憩と給油をし、帳前に深大寺に着いた。ノリ

にガンさん、三鷹署村上一課長が出迎える、嬉しさ余り、まりも顔を紅潮させていた。無理もない会うのは一ツか月振りだ、誰よりも皆の無事の帰還を喜んだのは、まりだったかも。

そんなまりに次郎はハイタッチ、皆がにやついている。我に返ったまりは言った。

「マキちゃんお願いね、駐車場のまな板にマグロが載っています裁いて、

次郎は皆でテーブルを適度にくつつけて、醤油とワサビはテーブルに乗せて、マキちゃんの脇でツマ作り、器具は流しの下に入っている、大根も」まりは次郎にテキパキと指図す。

「まり、分かったけど何がどうなるんだ」

「本日午後六時より、マグロ井のサービスデイと称し、所轄にお触れを出した。シヤリは村上一課長にお願いした、まもなく届くだろう、発泡スチロールの器は200個用意、箸もだ。

「アツいけない次郎駐車場に、ブロックを組んで釜戸らしきを作って、炭を起こして」

指示出された次郎は、戸惑い始めた。そんな次郎に業を煮やしたか、ガキさんが出て来た。

「次郎さん、そいつは俺に任しときな」と言いつた。

「日葵、何突っ立ってんだ軒下にある枯れ枝と、炭を持ってこい」

「親にも次郎さんにも、そんな言い方されんのに、この叔父は」

とブツブツ。でも日葵は出来ている、すぐさまウチワと火吹き竹で炭を起

こした。

「ヒマちゃんありがとう、そこの脇に置いてある金網を、ブロックの上に乗せて、マキちゃんが捌いたカマを乗せ焼いてね」

「よっしゃっ」

とヒマは言う。

ヒマー、そのーだがとガキさんは渋い顔する。

「ガキさんどうしたの、そんな渋めな顔をして」

と裸ルツクのマキが聞いた。

「先輩二人がーと、無理もねー後輩が似るのも」

と言った。

「ガンさんは今まで見た事ない、ヒマちゃんの肌と体の線を見せられた」

戸惑っていると、

「ガン叔父さん確り見て」

とヒマちゃんに言われた。

厨房からビールサーバーが、動き始めた。帳も迫ったよ飲み始めても構わんよ」

まりが言った。

マキがあと少しで終わると言い、捌いた切り身を、大型の発泡スチロール箱に詰めた。中落を作りが始まる、大型スプーンで起用に中骨から削いで行く。ミニパトが裏庭に入ってきた、制服の婦警さんが三人乗っている。助手席にいた婦警さんが言った。

「ご飯持って来ました、何処に置きましょう」

傍に居たマキが、

「自分も手伝います、中のカウンターに置いて下さい」
保温用器に入ったご飯は5つだ。

「一つづつ持ち運べば一遍で終わる」

と言いつつ持ち運ぶ間に、婦警さんは運び始めた。何を手伝ったらいいか、まごついていた一課長が言う。

「どうせ総務課長が、酒飲んじゃダメだと言ったんだろ、今日の業務は終わったんだよな、ミニパトは置いて行け、飲んでも構わんぞ、何か言われたら一課長に、飲めと言われたんだと言えばいい、カウンター席にサーバーがある、大ジョッキで、いくら飲んでもいいが飲み残しは厳禁」

ハイと言って婦警さんは中に消えた。今宵はガキさんが仕切っているようだ。

「サアー皆さん、今宵は次郎さんにも、まりさんにも聞いています、コーヒーショップいっぷく感謝デイです。心行くまで飲んで食べて下さい。飲み物も鉄火丼もたっぷり用意してあります。

「では、乾杯を誰にして頂こうかな」

ガキさんは見回した、一点に目が留まる、かすりの着物に赤いタスキに赤い前掛け、アップした髪に、さり気なく指した九谷焼のかんざし、そんなまりに言った。

「よし、カンパイは決まった、いつも旨いコーヒーを、提供して下さいる、まりさんをお願いします」

突然振られたまりは戸惑ったが、にっこりしている次郎を見、踏ん切りが

ついたんだろ、コップにビールを注ぎ声高々に言った。

「皆さんにいつぶくにカンパニー」

拍手が起こった。

飲んで食べて、歌にダンスに日葵の名パーソナリティは、冴えわたる。水上警部が次郎に寄って来た。

「次郎さんご苦労様でした、収穫は多きと想うが実際の所、どうでした」

「余り多くを語らない様になっているが、一課長には言っておこう。仰る通り収穫は大です、所構わず話してしまうと、情報漏れもあります。そんな訳で多言は控えています、いくつかの確認事項もあります、それが終われば即、踏み込みです。一課長と特殊隊には、事前報告はあると思っいて下さい、明日、警察便で函館南署から三鷹署に小包が届く、中味は住吉漁港の底攫いをした時の取得物と、銃殺された健斗さんの物だ、それと消音器付きの拳銃です。着いたら直ぐ小生に知らせて下さい取りに行きます。さつきも言ったように多言は無用です」

一課長はVサインをしサーバーに向かった。いつぶくの感謝デイは、軽快なリズムと共に、ノリの涙の連絡船でお開きとなった。皆それぞれに握手をし再開を約束し、いつぶくを後にする。いつも通りいつぶく関係者だけになり、コーヒーで労を労った。次郎は言う。

「皆、苦労様でした大きな収穫はあった。

まだ、具体的な日程は決まっていないが、Xデイが過ぎるまでは多言は慎んでくれ」

皆は親指を立てた。

「それと今、車を呼んだ。」

今夜は車は置いて行ってくれ」

了解と言った表情で皆コックリ。

「日葵は俺が預かる、明日は俺の責任で釧路便に乗せる」

と稲垣巡査長は言った。

「三鷹方面は私が送り届ける」

と村上一課長は言う。次郎とまりは最後を確認して二階に上がった。次郎はマキとカナが、ひそひそ話していた、気になると言った。

「二人だってそうした事あるんじゃない、それよりも風呂に入ったら」そうだなと言い次郎は風呂場へ行く。

「さっぱりした」

と言い上がって、レミーマルタンを嗜み始める。まりも久々の次郎と二人、嬉しさ余りか夜具に着替えもせず、バスタオル姿で、レミーマルタンを飲み始めた。翌朝、次郎は朝参から帰った。豆腐とあげの味噌汁にサンマの開き、納豆での朝飯だ。

「何時もの谷端家の朝ご飯が戻った」

まりが言った。

「次郎、お世辞もあるうがやっぱ、まりが一番場でしょう」

と言った。

次郎はいつも通りコックリ一つ。そんな朝の会話をしているとピンポンが

「あつ誰か来たこんなに早く誰だろう」

二階で次郎が出た、ガキさんだ。

「昨夜は遅くまでありがとうございました又、姪っ子が、一方ならぬお世話頂き、ありがとうございました。これから羽田へ送りに行くところです」「日葵ちゃん、次郎のお供大変だったでしょう。もつと若ければいいんだったが、なんせ還暦をとうに過ぎていて」

「まりさんそんなことないよ、いい人生経験と言うか、滅多に経験できん事ばかり、多少おっかない事もあったけど、次郎さんが一緒です怖いものなしです」

「そう、良かったね、あの高校生とのライブショウ、良かったんじゃない、皆ノリノリみたいで」

「マキさんとカナさんが上手にリードしてくれたので、自然に口が滑らかなにり司会進行が出来ました」

「そんなこんなで強引に連れ戻さねば釧路には帰らん、俺が飛行機に乗せてくる。次郎さん案してくれ、ありがとうございました」

「今日は帰るけど次郎さん、まりさん又来ます」

はい、待っていますと次郎は言った。

次郎はいつぶくの窓側に陣取った。PCのキーボード叩き始めた、無論北海道と八戸の纏めである。次郎の推理と事実を入れ、次郎流の捜査書類作成だ。村井瑠璃子は三月二十七日夕刻、函館駅に着いた。服装は旅人とも言おうか、コットンパンツにジャンパーと言った出立、普段の着用しているスーツとは程遠い、カジュアルルックとは、小生はその意図は分からん。函館駅で公衆電話で、健斗さんに電話を入れる、住吉漁港で待っていると、カジュアルルックの秘書室長を見、健斗さんは、あれ今日の服装はとでも言

いながら近づいた。瑠璃子はいきなりスカートに手を入れ、拳銃を取り出しズトン。健斗さんは力を振り絞って、ダイニングメッサージを残した。漁港棧橋奥に、瑠璃子は手配しておいた、第二山葉丸が停泊している。瑠璃子は乗り移り船主の、土田太郎と抱擁した。瑠璃子は健斗さんの手帖と携帯電話、それに拳銃を捨て、第二山葉丸は静に港外に出た。別紙その1。釧路から美瑛に向け出立す、途中から白のセダンが必要についてくる、ついてくると言うか、後先になり、小生等の先々に現れる。別段嫌がらせや襲う雰囲気はない。翌日旭川過ぎ滝川から、長い直線路を走る。途中休憩していると又、白のセダンが現る、が何気なく通り過ぎる。「自分等の行動が見えるようだこの場合、十津川警部によると、発信機が出て来る」皆半信半疑で車下に潜った。

「ケンジがあつたと言った、小さな黒い箱を持って出て来た。

「BMWにもついていると思う、良く探せと」

次郎が言った。

カナがあつたと叫ぶ、車体をくっ付けた狭い所に挟んだあつた。屈沙羅湖の煽り運転と、今回は被害はなかったがでこれで二件目だ。

それと登別温泉での襲撃事件、襲撃と言うより、小生等に付き纏っていた奴らを、待ち伏せしていたから相手方は抵抗した迄。未だ黙秘していると言うが、顔写真を警視庁へ送った、間も無く結果が出るだろう。登別を最後に、小生等への嫌がらせは無くなった。必要に小生等を付けまわっていた犯人は、何もしゃべらずにいると言う。彼らは、瑠璃子が関係していると断定、計画不履行により登別温泉否北海道を離れたと想われる。銃殺現場は函館市青

柳町の住吉漁港、函館南署と現場検証してみた、市電で青柳駅迄行き、そこから徒歩で戻れば、不審がられずに漁港に行ける。別紙Ⅱ。ここまで打ち込んだ所で、村上一課長が入って来た。

「次郎さん、函館南署からの届ものだ」

と薄めのDB箱を次郎の前に置いた。

「一課長直々で持って下さるなんて」

「いやー、私達は忙しいんで、一課長はヒマしてるんでしょ、ミニパトを引き取って来て下さい」

「そんな事を言われちゃったんで来た次第」

「一課長さん、優しいんだね見習わのくちやー」

「マキがいつも言っている、父っ様も少しは次郎を見習ってよ、優しいんだから、そう言われっぱなしだ」

「相分かった小生喉が渴いた、お茶にしよう。今、今迄を整理していた。後で詳しく説明する」

「村上一課長さん、コーヒー入りました、ケーキも置いとくね」

まりはそう言って厨房に戻った。

「マキちゃんの魚捌き玄人顔負けだね、それに大間で頂いた出刃、最高と言っていた。よつぽど、今回の捜査と言うか、北海道は最高だったと言ってた、ルンルン気分はまだ、抜けていないようだ」

「宿泊先のご主人が、おねーちゃんが捌くんけー、そんじゃーこれ持って行きなと言ったんです、一見名のある出刃の様だった。マキちゃんは大喜び、大事に使いますと言った」

「俺はマキの親父だと言ったんだが、俺より次郎さんの方が濃いようだ」
「マキちゃんの話はこの位にし、ケーキでコーヒーと行こう」

「一課長が言ったが言った次郎さん、今回の北海道調査は如何でしたか」と一課長が聞いた。

「皆の協力もあり、はっきりとは言えんが収穫は大です」

「例えばどんな事でしょう」

「ウーン、どっから行こうかな、村井瑠璃子から行こう、あつその前に、函館南署から送って来たDB箱の中を確認してみよう」

中には携帯と手帖、免許証が入っている。次郎は手帖を手にとった。

「不鮮明ながらも、読める文字も多い。神谷利一検事正と読める。」

「神谷利一って東都地検の検事正では」

「そうだその検事正が北海道で起きた一連の、事件に関わっている」

「次郎さん豪い事です、言わば司法のトップが相手では」

「些かもんだがと一課長、他所に喋るなど、それとなく言ったかな、東都地検秘書室の、村井瑠璃子室長も同様に、事件に関わっている」

「そんじゃー次郎さん、すぐさま逮捕状を取り身柄確保しましょう」

「一課長無理です、証拠が揃っていない、相手が相手だけに逃げられるが落ち、証拠固めをせんといかん、でも一課長、内堀も後僅か埋めるだけになった」 「それは何時頃埋まる」

一課長は事の重大さに分かった様だ。

「×デイとでも言っておこうか、その時は一課長にも連絡はするし協力を要請する。後、警視庁特殊隊とマトリ、警視庁捜査一課、二課にも要請する、

一網打尽だ。且つて情報が洩れ金振りもあつた、今回はそれを防ぐ意味で、協力要請は当日とする。言葉の綾もあり、小生の胸の内を喋ったのは、村上一課長さんだけです」

「無論、北野流道主村上一太郎さんにも、マキにも、決行日までは言わないで下さい」

「了解、でその決行日は何時頃」

「まだ言っていなかったな、瑠璃子メモの事を、そのメモを如何様に書き残してあるのか、そのメモが村井瑠璃子の実家、から見つかった。

八戸市の母親が持っていた、それがこれだ、北畠厚生労働大臣の名も記されている。薬物売買も、拳銃密売、土地不正売買もだ」

こりゃー豪い捕り物になるな、でメデイは何時の予定」

「来週、いや近い内だろう、健斗手帖と瑠璃子メモの解析次第だ。メモと手帖だ、時間があるようなら目を通してみてくれ、目が違えば見えないものも、見えてくると思うが。だけど手帖は滲んでいる所も多いが」一課長は目を通し始めた、昭和生まれと言うか、指に唾つけてページを捲る。次郎もよくやっている、まさに叱られるも暫しだ。一課長は一点に目が留まった。

「次郎さん、ちょっとこれ見てここです。Tkへ5pとあるが三日続けて、これは何である、健斗さんは聞いている。又、貴方の為にも、あんまり聞いただけす事は、良くないと記されている。一月の段階で健斗さんは、疑惑を持った又、瑠璃子室長は、この時点で殺意を持った。瑠璃子メモにも、殺意を持ったと記されている。Tkへ10pとか3p等、健斗さんの手帖を、さつと見ただけでも、この様な暗号めいた記載は、数点見つけた」「まだ他にも

ある筈だ、暗号と他記載に関して小生が解決させて見せる。一課長三日間の猶予を」

3p等、健斗さんの手帖を、さっと見ただけでも、このような暗号めいた記載は、数点見つけた」

一課長は「まりさんに、コーヒーごちそうさん」

と言い、ミニパトを運転していっぷくを出て行った。

次郎は擦れ文字多き健斗さんの、手帖と瑠璃子メモを、難しい顔をし見比べている。7年前の日付に〇月〇日にK、横浜税関通関と記されている。

それから5ヶ月後の〇月〇日にY、同じく横浜税関通関とあった。その後も、数か月置きに同様の事が書かれている。健斗さんの手帖にも三年前より、同じ様な事が半年置き位に書かれている、違うのはKへ5とかKへ、OからHへ、MBよりK5、SBよりK3等々ある。OからHへは①とか数ヶ月おきに書かれている。

「次郎、難しい顔していないでお昼だよ、トーストに野菜サラダだけど食べて、頭冷やして」

と言いPC脇にお盆を置いた。

「眼の違った所で見てくれないか、まりならどう解釈するこのメモを」

そう言って次郎はまりに見せた。首をかしげながらメモを見ていた、暫くすると言い出した。

「アルファベットは人の名か企業名で、数字は金額ではないでしょうか、それ以上は分かんない」

「まりもそう見たか、だけどまだ、分かんない暗号がある。どう解釈すればい

いのか」

「はい、休んで消化不良起こすよ、手帖とメモを置いて」

要約、マリの声が聞こえたか次郎は、トーストに手を出した。久し振りにテーブルに、次郎と向かい合いに座り、二人はコーヒーを嗜み始める。

「こんにちわ」

とBMWを取りに来たと、カナが入って来た。まりと次郎は何故か苦笑いをし「ご苦労様」と言った。

まりはそそくさと厨房に戻った。

「トーストとサラダでけど作るから食べ違ってね」

「ごっさん、いっただきまーす」

とカナ流に答える。

「参拝者さんがボチボチ来るかなー、来ない内に食べようと、三人掛けし昼食となった。

「手帖来たんでしょ、どんな事が書いてあった」

「健斗さんは不正を暴いていたようだ、瑠璃子メモと同じような事も記されていた」

「即、逮捕じゃーないの」

「まだ、確認しなければならんところもある、直ぐは出来ない」

×デイが決まったら直ぐ教えてね」

「教えん事には、ここにこーしてはおれん連絡するよ」

そんなカナだが話は尽きない、がもう帰れなばと言いながら、半時が過ぎた頃、参拝帰りも多くなった、カナは要約帰るエンジンが掛かった。ご馳走

さまと言い、軽快なエキゾースト音を残し走り去る。その後も次郎は手帖と、メモ書きと首っ引きした。

「次郎さんいるかい」

とガキさんが入って来た。

「姪っ子は午前の釧路行きの際に乗せた、今夜は親子水入らずで、テーブルを囲むと思うよ、ありがとうございました。昨日は忙しかった事と言いながら、北海道の礼も言わずに帰ってしまった。今日改めてお礼を言わして頂く、ありがとうございます」

「ガキさん、小生との仲じゃーないか、堅苦しい事はなしや、いつも通り行こうぜ」

「そう言う所、いかにも次郎さんらしいな、日葵ちゃん良い娘さんじゃーないか、話は上手だし、マキとカナとの溶け込みも早い。然も十津川警部の助手さんだ、申し分ないよ、得意の推理も披露してくれたよ」

「そうかい、そんな事あったのか、あいつ何も言わなかった。だけど次郎さん、宿泊代だって並みもんじゃーないだろ、日葵は一銭も出しとらんちゅうやないか、ガソリン代位は出したかと思っただが、それも出しとらんと聞く」

「チームいっぶくの暗黙の了解です又、本職持ちで有給を利用しての従事であるが条件、出来なければ誰とも参加は出来ない。チームいっぶくは会費、旅費等は取ってはいない、その代わりと言っちゃー何だが、給料は出ないし危険と隣りあわせ、リスクは大だ」

「リスク等は当然ながら、日葵も承知の上と想うが、今回は大変な金が動いたのでは」

「まりも小さいながら、コーヒーショップを営んでいるし、小生にも十分過ぎるとは言えんが蓄えはある、小生に、賛同してくれる人ならば拒わん。それが小生や、柔術には疎いが彼女ならではの仕事はある、日葵ちゃんが来ると言ったら拒わんよ」

「そう言った言い方、現役時代の次郎さんが伺われるな」

「日葵が来たら次郎さんに任せます、で捜査の状況いかほど迄進みましたかは」

「ガキさん、知っているだろう小生は上下なく話す、敬語は止めてくれ」「あいやー、すまん、そうだったよな気を付ける。今回の捜査は何処まで進んだ」

「内堀を後僅か埋めれば」

「えっ、そんなとこまで行ったのか」

次郎は言う、「そんな中には、十津川警部の助手、姪っ子さんの推理も入っている、大活躍だったよ、ガキさんも日葵ちゃんに頭上がらんな」

「暫くは日葵の好きにさせておこう、×デイはいつ、何が出来るでもないが、決まったら俺にも教えてくれ」

「ガキさん分かったよ、だけど今迄何回となく捜査情報が洩れ金振り。誰から洩れたかは判明していないが、防止する意味で×デイ発表は当日とす。まだ、調べなければならん諸事情がある、それが終わらん内は、日にちは決定は出来ん」

「次郎さん急かす事はせんが、さっきも言った様に×デイ決まったら俺にも教えてくれよな」

とガキさんは言い、コーヒーを飲み次郎に「又来るよ」と言い、いっぷくを後にする。次郎はPCに向かい、キーボードを叩き始めた。登別温泉で迄、付きまとわりついていた不審者は、それからは姿を見せなかった、八戸にいる時、理紗からラインが入った。10日の休暇予定だった村井瑠璃子が、用事が早く終わったので、休暇を5日に切り上げて帰ってきましたと、昨日から出勤。溜まった仕事は、持ち味を生かし手際よく捌いたと書いてあった。小生等を忠告めいた嫌がらせ行為、それが当事者はしくじった、指示を中断し足が着くのを警戒し、瑠璃子は東京に戻った、一連の出来事は瑠璃子が指示を出していた、小生は判断した。メモによると闇献金授受、薬物取引は厚生労働大臣の北畠善三の、河口湖の別荘が良く使われている。又、横浜税関は今でもフリーパス、薬物輸入、拳銃密売、取引は日常茶飯事だ。それに幣舞橋の船溜まりからは、土田太郎の免許証と、携帯電話は海底から小瓶は、焼け焦げたスチールデスクから出て来た。住吉漁港の底からは、消音器付きの拳銃と健斗手帖、携帯電話が出て来た。この事実を動かす事は出来ない、確かたる証拠になる筈だ。後はメデイはいつなのかだ。「こんちわ、ミニ取りに来たよ」とマキが入って来る。まりがコーヒーを淹れケーキを出した。

「どうだいマキ、マキ流の推理を聴かせてもらおうか、これは小生流に纏めてみた」次郎はそう言い束ねた、A4紙をマキに渡した。

「次郎良くここまで纏めたね、自分の入る隙は無いよ」

「そう言わんといて、マキ流に推理もあるだろう、それを聞きたい」

そう言われたマキは束ねた、A4紙を引き寄せ目を遠し始めた、別段マキが

引つかかる部分はない様だが、ねー次郎と言った。

「屈沙羅湖と登別温泉での犯人のその後は又、単独犯だったか指示者がいたのか、それは誰だったか、村井瑠璃子は関係しているのか、そこいら辺が記されていないが」

「書き損じてしまったようだな、然し暫定であるし現在確信がない、そんな訳で記しなかった」

「屈沙羅湖の犯人は、アラフォーの女性から小遣いを貰い、脅しただけと言っていた、BMWの物損事故で処理される。後日理沙からこの日の前後、瑠璃子秘書室長休んでいると言う。登別温泉での犯行人数は2人、釧路を出た時から見え隠れし、後をつけていたと言った。美瑛では発信機のセットに成功、追尾しなくても良くなった。登別温泉では追従していたが、待ち伏せられ格闘の末、確保となる。この辺りは瑠璃子秘書室長は休暇中だったが、休暇を早め帰京してる。犯人側は、アラフォーの女性から頼まれたと言っている。二人の顔写真を東京へ送ったら、二瓶企画の一員らしいと変えつて来た。二瓶企画は表向きは要人警護とあるが、実際のところ不動産不正売買、薬物や密輸に加担されているらしい。そこの二人が小生等に、嫌がらせをしってくる」

次郎の話を聴いていたマキが言った。

「だけど嫌がらせをする程度で、何故にピストルでドカンは無かったのか」
次郎は考え込むような素振りで言う、

「結論らしきもないが、チャンスはいくらでもあった、が実行されていない、何故かが残る」

「ここに取り引の決行日とあるが何時の事」

「分かんない、分かっているのは、1日で全ての取引を終わらせる、闇献金、薬物拳銃密輸売買等の取引だ、河口湖の厚生労働大臣の北畠善三の別荘で行われる。近日中とまでは判明したが、その月日が分からない。話のあやでマキに喋ったが多言は無用」

相分かったと次郎流返事をした。

「時間だ、小学生の稽古が始まる、道場へ戻る」

とマキは言い、主人を迎え嬉しそうにエキゾースト音を残し、ミニは走り去った。村井瑠璃子と繋がっているのは誰か、ダイレクトに、北畠大臣に繋がるとは考えられん。とすると誰なのか、やはりメモの通り、秘書室長と神谷検事正は、太いパイプで繋がりがあのか、司法のトップと言っても過言でない検事正が、関わっているのだろうか、そうだとしたら裏付けは、このメモが唯一の証拠となるのだが、軽くかわされそうだ。

「そんなに難しい顔していないで、コーヒータイムしよう、私と差し向かいで」

とまりは言い次郎の前に座った。

「こーしていると、若いカップルに勝るとも劣らんだろ」

次郎はまさに茶目っ気を見せた。所で次郎とまりが言った。

「あのメモは其々に、思い切って記されたと思う。瑠璃子秘書室長は保険を残した、健斗さん手帖は、不審に思い調べ真実に行き着いた、でたらめでは無い。

「次郎私はそう思います。コーヒー冷めちゃうよ飲んで、ケーキも食べて」

何故か今日のまりは、厳しい山頂へ続くルートを、登り詰めたクライマーの、自信に満ちた表情をしている。次郎は聞いた、

「今まで見た事のない表情だな」

と言った。

「皆で北海道に行って調査、いや捜査して来た。結論は出た、自信を持って前を向いたら、次郎が動かなければ進まないよ」

まりの気迫に押され次郎は、「後は、大掛かりな取引は何時なのか」

とまりに言い、A4紙を閉じハイタッチす。

マキとカナを乗せた、モスグリーンのミニが、六本木の大屋隆雄ビルの塀際に止まった。カナだけが降りそのままビルに入った。エレベーターで5階に登り、二瓶企画の受付の前に、服装は例のいっぽく仕様だ。厚化粧の受付嬢に言った。

「私は世田谷在住の井上摩耶です、親から受けづいた共同住宅も、ボロアパートとなってしまう。建て替えを予定しているんだが、数人が退去に応じてくれない、手助けしてくれないでしょうか、よって代表者様とお話したいのですが」

受付嬢は連絡を取っていたが、

「代表の栗橋健明がお会いするそうです、その階段から6階に上がって下さい、踊り場の所のドアを開け、中に入って下さい。そこに栗橋がおります」

受付嬢は決まり文句で言う。カナは踊り場で深呼吸をしノックした、どうぞと太く男の声がした。

カナは失礼しますと部屋に入った。窓際に大型のディスクがデーンとし、トレーニング機器が煩雑に置かれ、応接セットが、間を縫うように置かれている。屈強と言える男が言った。

「代表の栗橋健明です、お嬢ちゃん申し訳ないなむさ苦しい所で、なんせ男所帯なもんで、そこのソファアに腰降ろして、コーヒーを頼んどいたから、飲みながら依頼の話の話を聞くとしよう。

「お待ちどう様」と先程の厚化粧な受付嬢が、コーヒーを運んで来た。

「君は下がっていいよ、要があれば呼ぶから」

と代表が言うと、受付嬢は意味深にニヤリとし、階下に下がって行った。

「井上摩耶さんこの依頼書に、必要事項を記入して下さい」

カナは偽りの物件を記入し、栗橋に渡した。

「世田谷区北烏山と言うと、土地相場はかなりのもんじゃない」

の栗橋の質問にカナは、

「はつきりした事は不明です、だけど固定資産税も安くはない、今の家賃だけでは赤字です、今風に建て替えしようと想っています。

受付さんにも言ったんですが、数人が出て行ってくれない。そこで二瓶企画さんに来た次第です」

栗原代表はカナに向き直り言った。

「どちらから、二瓶企画を聞かれたか」

と栗原代表は問います。すかさずカナは用意した事柄を言った。

「ネットに載っていました、アパート経営でお困りの方、お電話を見てきました。それと建設業の大屋隆雄さんとも、親しくさせて頂き先日お会いした

時、二瓶企画さんを紹介させて頂いた。私の仕事先からも近い、電話を入れ
たら、私どもにお任せ下さいと返事がきました。それで今日です」

栗原代表が肢体に異様な、眼差しを投げ始める。カナは気付いた、誘うか
の如く足を組み直したり、コーヒーカップを取る仕草にも、必要以上に前屈
みになったり、栗原代表は見ないようで、それとなく視線がそつちに、悟ら
れん様にか質問してきた。

「退去は何時頃までを予定している」

「早い方が良い、10日位でどうでしょう」

「立退きに応じない人は何人」

「はっきり応じられませんと言って来たのは5人です」

「10日は厳しいかも知れん、4日足して2週間でどうだろう」

と、カナが言う。

「はい分かりました、2週間で請け負いましょう」

栗原代表は「百万でどうだろうか」と言う、代表の目つきが異様なまでに
変わって来た、羊を狙うオオカミの目だ。

「支払いは、前金と終了後の2回に分けて、お願いします」

カナは躊躇するも承諾す。

「で、井上摩耶さん、申し込みと同じして、前金を頂くようになっていま
すが」

カナはどうしましょうと言った顔をした。

「井上さん、何かお困りな事でも、ご相談に乗りますが」

カナは来たたとほくそ笑んだ。

「持ち合わせがない、前金の50万円は後日ではだめでしょうか」

「構わんよゆっくりしていきな、呑めるんだろグラスを用意する」

「栗原代表さん、これじゃー依頼金額が増えてしまふんでは」

「井上摩耶さん否マヤちゃん、心配には及ばんよカンパイしよう」

「だけどころな上等なお酒、毎日飲んでいるんですね、私の依頼の様な仕事、一杯請け負っているんですね、私にも出来るような仕事、回してくれない」

栗原代表考え込むように、グラスを傾けている、突如言い出した。

「お喋りは上手の様だな、武術は何か習っている」

「良く聞いて下さいました、空手と柔道は有段者です。試して頂いても構いませんよ」

又もや代表は考え込み様にグラスを傾けた、突如カナの背後から鉄拳を出した、僅かに左に避け、突き出された鉄拳をむんずと掴み、見事一本背負い。

「マヤちゃん合格だ、何時からでもいいから、二瓶企画で働いてくれ、

明日からと言っても都合もあろう、帰られたら出勤日を検討し教えてくれ、待っているよ。

難しい事ではない、普段は受付業務が主だ、他に随時出張は入る、が複数人以上の行動で単独はなし、悪い話ではないだろう。これは業務外だが、3日後の7月17日、山梨で大仕事がある、二瓶企画の殆どがそっちに行ってしまう、ここは手薄になる、明日からでも来て欲しい」

直ぐに答えずカナは焦らし戦法か、お代わりを要求した。

「おっゴメン気付かなかった、強い様だね高級クラブを奢るよ」

「っうー嬉しい、さつき山梨で大仕事って何なの、連れっけてくれるならそっ

ちの方がいいな」

「今回は既に段取りが出来ている、六本木を守ってくれ」

「了解、後方支援ってとこかな」

「そうだ、頼むよ」

代表は気分よく飲んだんだろう、大分飲み、口元が揺るぎ始めていた。北畠善三別荘での大取引は、7月17日だとカナは腹の中で囁いた。

「所でマヤちゃん、その素晴らしい肢体を拝ましてくんのかな」

「商談成立と美酒、良いですよ栗原代表さんに見て頂けるなんて最高、シャワーは何処、陰になっている部分までしつかりと浴びて来るね」

と言ってカナはシャワールームに消える。その後、栗原代表はソワソワしながら飲んでいる。受付に建設業の大屋隆雄が来た、今代表の所に社長さんがご紹介なさった、井上摩耶さんが見えなくなっています」

「えっ誰だろうその女、最近紹介した覚えはないんだが」

「そんな事ないですよ、立退き問題も相談していました、近々ここで働くように話していました」

受付嬢は、怪訝な顔つきの大屋隆雄を覗き込んだ。

「変だ可笑しい、女と代表は何処にいる」

「代表室ですが」

「一緒に代表室に来てくれ」

二人は6階の踊り場で、部屋のドアを叩いた。

「代表、返事して下さい、話が可笑しいドアを開けて下さい」

ドアは空く気配がない、大屋隆雄はドアを蹴っ飛ばし始める。カナはバレた

かやバイ、逃げるが勝ちとばかりに、タオル1枚なれど窓から、隣りのプールへダイブ、プールサイドから走り、5m程の塀を駆け上がりミニ脇に飛び降りた。通行人が、スツポンポンの女性が、塀から降って来たんでびっくり仰天、皆眼を丸くする。カナは助手席のドアを開けると同時に、「バレた早く出して」と叫ぶ。

「幸い追跡はない様だ、取敢えず最寄りのランプから高速道へ入ろう。でもカナその恰好はどうしたの」

「ハニートラップや、だけどバレちゃった、でもマキちゃん、収穫大だよ河口湖の、北畠善三大臣の別荘は7月17日に集合、大掛かりな闇献金やら薬物売買、拳銃の取引もある」

「カナちゃんやっただじゃーないの、それにしてもその恰好じゃー、廻りが変な顔してきている、自分のコートが後部座席に乗っているから、取敢えず引被ってて、よーしいつぷくにGO」

閉っていたがまりが片付け物をしている。

「まりさんこんばんわ」

と裏口からマキとカナが入って来る。

「こんな時間にどうしたの、あつカナちゃんスツポンポンで」

「まりさん詳しくは後で、今はまりさんの着るもの貸して」

「待ってて、次郎はシャワー浴びているから、もう直ぐ降りて来るよ」
まりの洋服を着、カナは落ち着いたようだ。

「マキちゃんカナちゃんコーヒー飲んでて、次郎呼んでくるから」
と言って2階へ上がって行く。

次郎はシャワーを浴び終わり、パジャマになっている。

「いつぶくに誰か来てんのか、賑やかだったか」

「次郎が好きそうな女の子が2人来ていますよ、だけど次郎、起こらないと約束して私が確り、代わりに怒っておきましたから、もう起こらないと約束して」

「相分かった」

久し振りの次郎流返事に、まりは思わずクスッとす。

「私も下に降ります」

次郎とまりは下に降りた。

第一声は「カナご苦労さん、大変だったね」だった。

マキとカナは雷を想定してたんだが、二人は顔を見合わせてホツとした表情、マキが喋り出した。

「良いと思ってやった事です、大収穫がありました。7月17日に大物が勢ぞろいし、大掛かりな闇献金や取引が行われます」

カナが言い出した。

「栗原代表が言っていた、河口湖の北畠大臣の別荘で、大きな取引及び闇献金授受が行なわれます。警護と称して、二瓶企画は栗原代表を始め全員で対処すると言っていた。」

「全員と言うと何人位かな」

「はっきりした人数は不明だが、散らばっていた構成員を集め、河口湖に集結させると言っていた。凡そ30人程だ」

次郎は、うんと頷き一呼吸おいてカナに言う。

「小生等にとっちゃー最良の情報だ、だけどカナ、ハニートラップはこれが最初であり最後にしてくれ、小生の分からん所で方が一、嫁入り前の娘に、怪我でもされたら両親に顔向けが出来ん、カナ分かったよな」

すぐさまマキが言った。

「次郎に言っとけば良いのって言うの」

「マキ、いい加減にしろ」

ハイと言いなながら二人は下を向いてしまった。

「二人には明日があるんだマキ、カナを自宅まで送ってくれ、そんでゆっくり休む様に」

と送り、次郎は2階に上がり、レミーマルタンを傾けながら、考え込むかのように宙を見つめた。

翌朝、アサリの味噌汁にアジの開き、納豆に冷ややっこの次郎流の朝飯だ。食後次郎はお茶を飲みながら、新聞に目を通す。これと言ってリピートせし記事は、載っていない。まりは既に階下に行き、開店準備に余念がない。次郎は、何時も通りと言うか、台所で食器洗い。後に次郎はいっぷくの窓際に陣取り、PCと相対した。雨垂れタッチでキーボードを叩き始めた。空前の捕り物になるだろう、情報漏れを防ぐ意味で連絡は、極力控えるが、7月17日の前日16日までに、三鷹署刑事部、水上一課長及び警視庁特殊隊樋沢隊長の二名には、総監宛に全責任は当方にありと、退職届を提出させる。捜査一課、二課、三課、マトリさんには当日朝通報する。場合によっては山梨県警、山梨消防署にも協力要請を発する。出立は当日の朝7時とし、メンバーは小生とケンジにマキとカナ、ヒマには連絡はしてみる。ガキさんも嗅

ぎ付けて来るだろうが、誰が如何様に襲って来るとも分からん、まりと二人でここを守っててくれと言う。

「次郎、あんまり難しい顔しないで、コーヒーでも飲んでリラックスしたら、それとマキちゃんとカナちゃんには、おっかない事はさせない様に」とまりは声を掛けた。

次郎は頷いているような素振りをする。コーヒーを飲みながら、健斗手帖と瑠璃子メモを見始めた。薬物、拳銃の不正輸入及び売買と不正輸出、議員への闇献金、殺人、これ等は双方でダブっている、不動産売買においても不正の塊だ。住吉漁港、幣舞橋の船溜まりからも証拠品は上がっている。7月16日帳の頃いっぷくに、次郎とケンジにマキとカナが集まった。突撃予定を検討し始めた。いっぷくの押し開きのドアが慌しく開いた、新庄彩花が呆然と立っている。その姿を見てカナが叫んだ。

「あやちゃん、その傷はどうしたの」

彩花は、意味不明も多々なれど話し始めた。

「吉祥寺駅のアトレ、ケーキ屋ジジババが、襲われました」

何ーっとカナは発す。

「店の被害は、怪我は」

「私は打撲とガラスで切った程度で済んだが、おじさんおばさんが救急車で、病院へ運ばれた」

「容態はどうなんだ」

「不明としか言いようがない又、ショウウインドウからバックヤードは、めちやめちやです」

「犯人の目途は」

「お巡りさんが来る前に逃走、だけど俺は二瓶企画の栗原だと言っていた。お前つとこの娘に馬鹿にされた、その仕返しだと言っつけ、そう言っつて立ち去った」

「酷でー事しやがって、栗原」

とカナは立ち上がった。

「クロヒヨウ、何処に行く、一人で行っても振り返りに会うだけ、この次郎に任せなさい。今やる事はご両親の入院先に行く事だ」

次郎はカナに言った、間入れず厨房でまりがいう。

「カナちゃん分かるね、次郎に任せておきなさい、一刻も早く病院へ」

まりの説得に頷いた。次郎が言う、

「無事が確認取れたら明日7時に待っている。江戸時代の敵討ちではない、今は令和だ、悪人を取っつ構えて裁判所に送る、それが真の敵討ちだ。」

カナ、分かったな」

次郎の言にカナは頷いた。

レミーマルタンを飲みながら次郎は電話している、相手は三鷹署刑事課の村上課長と警視庁特捜隊の樽沢隊長だ。

「ご両人、次のように記して明朝の警視庁便にて、総監に送付されたし」

「次郎さん何て書けば良いんだい」

「難しい事じゃーない、今日いや今日とは明日の事、我々の身近で起こる事は誰の責任でもない、その責は我々二人にありと連名で記して下さい」

樽沢隊長と村上課長は電話の向こうで、豆鉄砲を食らったような表情を浮かべた。

「書けなければ書かなくなつたつて良い」

二人に次郎節がさく裂した。

「次郎さん何故の事、せめて触りだけでも教えてくれまいか」

そんな声に次郎は一言「明日分かる」と言った。抛無い事情とでも言おうか、元名刑事谷端次郎の頼みとあればと二人は記されざるを得なかった。

サアーこれで準備は整った、全ては明日だ。次郎はレミーマルタンを飲み干しベットに潜り込んだ。7月17日早朝、まりは厨房にいた、サンドイッチづくりに余念がない。

「おはよう」

と言って次郎がいっぷくに降りて来る。カーゴパンツにジャンパー、シャツはタータンチェックのボタンダウン、いわゆる次郎仕様。だけど表情は、幾分強張っている様に見える。次郎とて、大戦を控えている故無理もないだろう。堪らずまりが声を掛けた。

「次郎、何はともあれ、出かける前はお茶を飲んでと、昔の人は言っていました。それに習ってお茶ではなくコーヒーだが飲んで、気持ち落ちつかせては如何ですか」

まりが言うと、深呼吸をしコーヒーを飲み始めた。6時チョイ前にマキが、続いてケンジが入って来た。おはようとでっかい声で、ガキさんが入って来る。思わぬ客人来訪に次郎は、はたと動きが止まった、次の聞きなれた声に又もや、うっえつと声を詰まらせた。

「昨日の最終便で来て、叔父の所に泊まり、送ってもらいました。自分も参加させて下さい」

「次郎さん娘から聞いた、俺がまりさんと確りと留守番しているから、姪っ子を頼むは」

「ガキさんありがとう、そうさせて頂く、がリスクも考えられる」

「それは本人も承知上だ、心配には及ばん」

「サアー皆さん、出かける前にはお茶を飲んで」

と、まりは言う。

「次郎さん、カナちゃんが見当たらん様だが、欠席」

「必ずしや来る、休む訳がない。しかし気になる事がと言い、昨日の出来事を説明した」

「カナちゃんは親御さんが心配だろうな」

皆難しい表情になり無言が続いた。

「聞きなれたエキゾースト音がし、裏の駐車場に止まった。カナちゃんだカナちゃんが来たー。皆は顔を見合わせ親指を立てた。」

「遅くなりました、病院に行って親の様態は見て来た、話もでき大きな外傷もなく回復を待っただけです。そんなこんなであるが昨夜は、病院に泊まりました。今朝、今日一日を看護師さんをお願いし、今になってしまいました。申し訳ございません」

「そんな事はどうでも良い、親御さんは大事にならなくて良かった」

と次郎は言い左手を、カナの右肩に手を置き、右手でカナの左腕をポンポンとタッチし次郎は、言いだした。

「まり、出陣だ、コーヒーを入れてくれ、それと火打石を」
と言った。